

Title	怒りについて：17世紀イングランドの視点から
Sub Title	On anger : perspectives from seventeenth-century England
Author	沼尾, 恵(Numao, Kei)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2024
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2023.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究の目的は、ジョン・ロックを中心とした17世紀イングランドの思想家たちによって怒りというものがどのように評価されていたのか明らかにすることであった。怒りは伝統的によくないものだとされてきた。特に古代ローマのセネカ以降、怒りは否定的に評価されてきた。このように怒りは伝統的にあまり高く評価されてこなかったが、近年、それを見直す動きが見られてきた。しかし、怒りを肯定的にとらえる昨今の研究では、えてして復讐を含む伝統的な怒りの定義を変えている。これに対して、17世紀の思想家たちは古代の怒りの考え方を継承しつつ、独自の工夫もこらしていた。本研究は、復讐的要素をもちながら怒りを時として正当化できるものと考えたロックの思想を明らかにすることを試みた。本研究では、ロックがいかにして復讐の「復讐性」というものを理論的に和らげることができたのかに焦点を当て、解明した。 研究成果は、2023年5月にニューヨーク大学において海外の若手・中堅ジョン・ロック研究者が集まったワークショップで発表し、セッションのコメンテーターとともに会場のメンバーから多くの有益なフィードバックをもらった。そのフィードバックを活かしつつ、原稿をリバイズした。リバイズされた原稿はロックの政治理論における怒りの位置づけに焦点を当て直したものとなった。Locke, Anger and the Stateと題されたこの原稿を感情にかんする専門誌のPassionに投稿し、査読を経て掲載が決定した。 本研究は、時間的にロックの怒りに焦点を当てざるをえなかったが、論文では同世代の思想家のホッブズとの比較の部分もある。またフランシス・ベーコンへの言及もしている。まだまだ研究課題が残りつつも、研究期間内において大いなる成果を挙げたと評価している。 The aim of this project was to investigate views on anger in seventeenth-century England, with a focus on John Locke. Traditionally, anger has had a bad name. Recent scholarship on anger defends it, but does so at the cost of purging a key component, revenge. My research on Locke examined the way in which he kept the revenge component, yet was able to justify anger in certain cases. The output of this project was presented at the Locke and Lockeanism Working Group Annual Meeting at NYU. Based on feedback received at the meeting, the paper was revised, now focusing on identifying the place of anger in Locke's political theory. My paper 'Locke, Anger and the State' was accepted and will be published in due course.
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2023000010-20230235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2023年度 学事振興資金（個人研究） 研究成果実績報告書

研究代表者	所属	理工学部	職名	准教授	補助額	100千円 (C)
	氏名	沼尾 恵	氏名（英語）	Kei Numao		
研究課題（日本語）						
怒りについて：17世紀イングランドの視点から						
研究課題（英訳）						
On Anger: Perspectives from Seventeenth-Century England						
1. 研究成果実績の概要						
本研究の目的は、ジョン・ロックを中心とした17世紀イングランドの思想家たちによって怒りというものがどのように評価されていたのか明らかにすることであった。怒りは伝統的によくないものとされてきた。特に古代ローマのセネカ以降、怒りは否定的に評価されてきた。このように怒りは伝統的にあまり高く評価されてこなかったが、近年、それを見直す動きが見られてきた。しかし、怒りを肯定的にとらえる昨今の研究では、えてして復讐を含む伝統的な怒りの定義を変えている。これに対して、17世紀の思想家たちは古代の怒りの考え方を継承しつつ、独自の工夫もこらしていた。本研究は、復讐的要素をもちながら怒りを時として正当化できるものと考えたロックの思想を明らかにすることを試みた。本研究では、ロックがいかにして復讐の「復讐性」というものを理論的に和らげることができたのかに焦点を当て、解明した。 研究成果は、2023年5月にニューヨーク大学において海外の若手・中堅ジョン・ロック研究者が集まったワークショップで発表し、セッションのコメンテーターとともに会場のメンバーから多くの有益なフィードバックをもらった。そのフィードバックを活かしつつ、原稿をリバイズした。リバイズされた原稿はロックの政治理論における怒りの位置づけに焦点を当て直したものとなった。Locke, Anger and the Stateと題されたこの原稿を感情にかんする専門誌のPassionに投稿し、査読を経て掲載が決定した。 本研究は、時間的にロックの怒りに焦点を当てざるをえなかったが、論文では同世代の思想家のホッブズとの比較の部分もある。またフランシス・ベーコンへの言及もしている。まだまだ研究課題が残りつつも、研究期間内において大いなる成果を挙げたと評価している。						
2. 研究成果実績の概要（英訳）						
The aim of this project was to investigate views on anger in seventeenth-century England, with a focus on John Locke. Traditionally, anger has had a bad name. Recent scholarship on anger defends it, but does so at the cost of purging a key component, revenge. My research on Locke examined the way in which he kept the revenge component, yet was able to justify anger in certain cases. The output of this project was presented at the Locke and Lockeanism Working Group Annual Meeting at NYU. Based on feedback received at the meeting, the paper was revised, now focusing on identifying the place of anger in Locke's political theory. My paper 'Locke, Anger and the State' was accepted and will be published in due course.						
3. 本研究課題に関する発表						
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)			
Kei Numao	Locke and Rightful Anger: A Sleight of Hand?	Locke and Lockeanism Working Group Annual Meeting	2023			
J.K. Numao	Locke, Anger and the State	Passion	Forthcoming			